

註

- (1) ストループ女史の『南明史』については、『明代史研究』一三号で紹介したが、上海古籍出版社より海外漢学叢書の一冊として漢訳本が刊行されている。
- (2) 石原道博、『明末清初日本乞師の研究』（富山房、一九四五）には、それ迄に石原氏が執筆した日本乞師に関する諸論文を取録している。
- (3) 周鶴芝、馮京第の日本乞師については、石原道博「明將周鶴芝、馮京第の日本乞師に就いて」（斎藤先生古稀祝賀記念論文集一九三七）がある。
- (4) この際の日本乞師に対する日本側の対応を検討したものに、小宮木代良「明末清初日本乞師に対する家光政権の対応——正保三年一月十二日付板倉重宗書状の検討を中心として」（九州史学九七、一九九〇）がある。
- (5) 黄宗羲については、呉光「黄梨洲『乞師日本』史実考」（文学論輯三三三、一九八七）がある。
- (6) この点について、藤沢誠「朱舜水の古学思想と我が国古学派との関係」（東京支那学会報一二、一九六六）もある。
- (7) 木宮泰彦の著書は、胡錫年訳『中日文化交流史』（商務印書館、一九八〇）として、中国語に翻訳されている。

グンナー・ヤーリング著

カシユガルからの印刷物

新免 康

二〇世紀前半の東トルキスタン史に関しては、最近になってようやく、政治的状況などを扱った研究が出現しつつある。ただ、これらの研究においては、当該時期に当地域のトルコ系住民自身によって書かれた一次史料の利用が、決定的に欠落していると言つてよい。しかし、実際は、一九一〇〜三〇年代に、トルコ系住民による文献も含む相当量の印刷物が、当時カシユガルに拠点を築いていたスウェーデン伝道団の印刷所で印刷され、配布されていた。しかもこれらの文献のかなりの部分が、スウェーデンに現存する。そのことを明らかにしたのが、ここで取り上げる『カシユガルからの印刷物』である。

本書の著者ヤーリング氏（一九〇七年〜）は、ソ連大使などを歴任したスウェーデンの著名な外交官である。学生時代の専攻が東トルキスタンの研究であった氏は、一九二九〜一九三〇年にカシユガルなどに調査旅行に赴いた際

(Jarring, G., *Return to Kashmir*, Duke University Press, 1986, pp.47-138. を参照) 相当量の東トルコ語の写本などを入手して持ち帰られた。それらを基に、外交官生活の合間に精力的な研究を続け、東トルキスタンの言語・文化などに関して余人の追隨を許さぬ研究成果をあげてこられた。現在は現役外交官の職務から引退して、執筆活動や東トルキスタンに関する研究に専心しておられる。引退後は、「爆発的」という形容がふさわしいほど夥しい量の著書を産み出されている。その一端は『*Turcica et Orientalia. Studies in honour of Gunnar Jarring on his eightieth birthday 12 October 1987*, Stockholm, 1988, pp. 192-204. を参照された。

まず、『カシユガルからの印刷物』の構成を一瞥しておこう。章の通し番号は本書自体には付されていない。なお、(3)の見出しは目次と本文で異同がある。

- (1) 緒言
- (2) 概要
- (3) 東トルキスタンにおけるスウェーデン伝道団の起源と発展
- (4) スウェーデン伝道団の文芸活動
- (5) 一九三〇年代の東トルキスタン革命期間中の印刷所

批評と紹介 新免

- (6) 未完成の仕事
- (7) カシユガルで印刷された出版物の目録
- (8) 補遺・東トルキスタンの外で印刷された出版物
- (9) テキスト中の題名その他の箇所に見れた用語の語彙解説
- (10) アラビア文字題名索引
- (11) 人名索引
- (12) 参考書目一覧
- (13) 略号

本書は大きく分けると、スウェーデン伝道団の印刷所の活動の歴史について記した(3)〜(6)と、そこで印刷された出版物のリストである(7)から構成されている。以下、(2)〜(6)の内容を要約しよう。

(2) 概要

本書は、伝道団印刷所の歴史と活動を、そこにおける製造物の目録とともに提示しようと試みるものである。

カシユガルにおけるスウェーデン伝道団の印刷所の活動に関しては、伝道団関係の資料からある程度窺い知ることが出来る。印刷所からの発行物の細目の把握には、カシユガルにおける伝道団の「文献委員会」による台帳の与える情報が有効である。また、スウェーデン教会関係の定期刊

行物に掲載された報告は、印刷所の作業状況や、政治情勢とその印刷所の作業への影響などについて伝えている。

なお、本書では、当地域のトルコ系言語に対する名称として、「ウイグル」ではなく、「Eastern Turk」(東トルコ語)という用語を一貫して使った。「ウイグル」という言葉は、一九三四年にソ連の影響力の増大に伴って現れ、印刷物の上では、一九三五年以降、恐らく政府権力からの圧力と強要によって採用されたものに過ぎない。

(3) カシユガルにおけるスウェーデン伝道

団印刷所の起源と発展

一八九三年にスウェーデンの Mission Covenant Church の会議においてカシユガルに新しい伝道領域を拓くことが決定された。一八九四年二月、Lars-Erik Högberg のリーダーシップのもと、伝道団がカシユガルに到着した。それ以前に、イスラム教からキリスト教に改宗したトルコ系の Avetarmanian なる人物が、一八九二年からカシユガルにとどまって、伝道活動、とくにバイブルの翻訳に従事していた。一八九四年のカシユガルにおける伝道団の確立に続き、一八九六年にヤルカンド、一九〇八年にカシユガル漢城、一九一二年にはイェンギ・ヒサルに拠点が設置された。

伝道団は、純粹な布教活動のみでなく、次第に医療・教育活動に参入していった。それにとめない、教科書を始めるとする印刷物に対する需要が逼迫したが、当時の南新疆地域には事実上本格的な印刷所は皆無であった。そこでスウェーデン本国から印刷設備一式をカシユガルまで運搬し、一九一二年にカシユガルに伝道団自身による本格的な印刷所の設立を実現した。アラビア文字とラテン文字の活字のフルセットが完備されるに至った。その後伝道団によるほとんどのすべての出版物が、このカシユガルの印刷所で印刷された。

印刷所の主要な目的は宗教的な文献の印刷・出版であり、次第にその文献の範囲は世俗的なものにもまで拡張していった。また、単に印刷物の製造にとどまらず、当地住民の印刷技術者の養成という側面において、発展途上地域への一種の「技術援助」という役割も担ったのである。

(4) スウェーデン伝道団の文芸活動

布教活動の必要から、カシユガルの伝道団の手によってバイブルの東トルコ語への翻訳事業が推進された。ところが、翻訳に中心的に関与していた前述の Avetarmanian とスウェーデン人スタッフの間で翻訳をめぐる不和が生じ、Avetarmanian は一八九七年に伝道団を離れた。この不和

は、一九〇〇年代には British and Foreign Bible Society とスウェーデン宣教師たちを巻き込む形にエスカレートした。しかし、伝道団による翻訳事業は継続され、一九一七年の「創世記」の翻訳出版を皮切りとして、完成を見なかつたものの、部分的には順次カシユガルの伝道団印刷所で印刷され、出版された。結局東トルコ語のバイブルの完全版は、カシユガルではなくカイロで、一九三九年（新約）と一九五〇年（旧約）に発刊された。

その他の宗教書、例えば聖歌集、小冊子などもカシユガルの印刷所によって多種類印刷され、発行された。その大部分が、スウェーデン語や英語の文献からの翻訳であった。

教育・文化の分野における伝道団の活動にともなつて、様々な印刷物が製造された。東トルコ語の印刷された教科書が、以前の書ききにかわつて一九一二年から登場した。これらは、スウェーデンの学校教科書に現地向けの修正を加えて翻訳し、利用したものである。狭義の教育面だけでなく、教育を受けた東トルキスタン住民たちに対する文化的な出版物もあつた。例えば、アラビア文字による東トルコ語表記の標準化を試みる正書法の手引、中央アジアの歴史書、東トルコ語の文法書など（いずれもスウェーデン人スタッフの手になる）が挙げられる。

広義の教育事業あるいは情報提供事業の一環として、多様な世俗的な内容の印刷物が発行された。当地住民にとつて実用的な価値をもつ出版物として、伝道団が活動を終了するまで毎年住民に供与された「暦」がある。また、世界文学の東トルコ語への翻訳本もいくつか出されたが、その中には『ベン・ハー』なども含まれていた。さらに、伝道団によって世俗的内容の月刊雑誌の発刊も計画されたが、この事業は頓挫した。

その他、カシユガルなどの商業関係者、カシユガル駐在英國領事、ロシア・アジア銀行などを依頼者とする、種々多様な印刷物、例えば宣伝広告、領収書のフォーム、名刺、等々に対する需要にも対応した。

(5) 一九三〇年代の東トルキスタン革命期 間中の印刷所

一九三一年にコムルで反乱が勃発したのに続き、一九三三年になると、トルコ系ムスリムの反乱はカシユガルやホタンなどにも拡大した。これらの地域の漢人の権力は払拭され、一九三三年一月には「東トルキスタン共和国」がカシユガルに樹立された。この時期、伝道団の印刷所は、トルコ系の革命勢力による完全な接収を免れたが、本来の伝道団のための活動に加え、「東トルキスタン共和国」政

府の印刷事業を担当すること余儀なくされた。「回族」軍が「東トルキスタン共和国」を打倒してカシユガルを占領すると、その宣言書を印刷した。さらに省政府軍が同市に進駐した段階で、省政府のために稼働した。しかし、政府権力のための作業は、少なくとも建前上は、伝道団の印刷事業の「サイド・ビジネス」として進められたものである。政府機関のための活動の所産としては、「東トルキスタン共和国」関係では、政治冊子や新聞だけでなく、紙幣なども含まれていた。当時これらを夜を徹して作製したと言われる。

ムスリム反乱が鎮圧され、盛世才が新疆省の権力を掌握すると、一九三四年以降、ソ連の影響力が顕著に増大した。カシユガルで勢力を保ってきた民族主義的なトルコ系指導者マフムトは、省政府の圧力下に一九三七年にインドに逃走した。これを契機として、カシユガルを中心に再びトルコ系住民による反乱が発生した。伝道団は混乱状態の中で孤立し、正常な活動を停止せざるを得なかった。一九三八年、ヤルカンドの伝道団がカシユガルに移動するよう政府から命令を受けたのに続いて、六月には全伝道団が四六年間活動の場としてきた東トルキスタンから退去するよう強制された。八月一七日、残っていた三名も完全にカシユガルを離れた（彼等の退去の経緯と日付は、カシユガル

駐在英国領事の報告によって裏付けることができる。India Office Records, L/P&S/12/2344, PZ.6551. 1938, など。——評者）。

国民党の新疆省に対する直接支配が確立した後、伝道団が撤収してから八年以上経過した一九四六―一九四七年に、新疆に一時的に入った伝道団のメンバーは、印刷所や関連する設備類が彼等の撤収後に破壊されていたことを発見したという。

(6) 未完成の仕事

伝道団は、その活動の場を去るに際し、印刷物を搬出することを許可されなかった。伝道団のファイルも焼却され、置き去りにされた印刷所のファイルも再発見されなかったため、この印刷所の最後の数カ月間の活動の様子を再現することは困難である。ただし、当時進行中であった仕事を示唆する文書によれば、いくつかの原稿が印刷に向けて準備中であつたらしい。しかしこれらは、未完成のまま放置されたか、もしくは伝道団撤退に関連して破棄されたという。

以上、(2)―(6)の要約を掲げた。

これに対し、(7)は、著者が把握できた限りにおける、スウェーデン伝道団カシユガル印刷所で印刷された出版物

の、解題付きリストである。量的に本書の最大部分を占めるだけでなく、内容的にもまさに心臓部と言って過言ではない。年次ごとに整理され、各出版物には年次ごとに通し番号が付されている。一九〇一年から、伝道団がカシユガルを離れる前年の一九三七年までをカヴァーする。出版物の言語は、東トルコ語・スウェーデン語・英語である。東トルコ語の各印刷物に関する情報の項目は、アラビア文字による原題名、題名の発音表記、題名の英語訳、印刷者名、ページ数、紙質、サイズ、文献の性格・内容についての解説、現存バックナンバー（定期刊行物の場合）、印刷部数（教会関係の刊行物で特定できる場合）、である。略号で、所蔵図書館（ルンド大学図書館、ウプサラ大学図書館、王立図書館（在ストックホルム）、神学校図書館（在リディング））を示す。出版物によっては、タイトル・ページの写真が掲載されているものもある。なお、題名などの発音表記は、著者の説明によれば、カシユガルやヤルカンドで実際に話されていた東トルコ語の発音を表示する。それは、新疆北部のトルコ系住民の言語（タランチ・ヴァージョン）に依拠した「現代ウイグル語」による転訛の影響を被る前の段階のものである。

この出版物目録は、単なる現存する出版物のリストではない。スウェーデンの教会関係の刊行物などから、カシユ

ガルの伝道団印刷所で印刷されたことが確認されながら、現在目にするのができない出版物についての情報も、収録されている。要するに、本リストによって、我々は、現在知り得る限りにおけるカシユガルでの出版活動の全容を通時的に俯瞰することが可能である。この点も本書のメリットの一つであると考えられる。さらに、(8)には、スウェーデンの東トルキスタン伝道団によって翻訳され、東トルキスタン以外の場所が発行された東トルコ語のバイブルに関する情報も掲載されている。語彙集や索引も完備しており、まさに至れり尽くせりの感がある。

さて、本書の価値・魅力は、様々な視角から語ることができるように思う。一つは、中央アジアのムスリム居住地域でキリスト教伝道団という当地域にとって異質な宗教的・文化的集団が行なった活動の特徴的な一環が、スウェーデンの教会関係の刊行物と「カシユガルからの印刷物」という根本的な資料から、体系的に明らかにされたことである。そこに我々は、文字通りの「異文化接触」の典型的な事例、すなわち、当地ムスリム社会が西欧キリスト教世界と遭遇した接点における極めて印象的な一面、前「近代」的な社会への「近代」的な印刷技術・文化の介入と浸透という看過し難い歴史の一断面、を見ることができる。確かに、このような伝道団の印刷活動が当地の社会・文化

にどのような作用を及ぼし、またその作用の結果が逆にどのように伝道団とその印刷所の活動に反映されていったのか、また、トルコ系社会において伝道団の全体的活動がどのような意味をもち、その中で印刷活動はどのような位置を占めたのか、というような問題に本書は答えるところが少ない。また、この伝道団の活動の実態そのものについては、Hultvall, J., *Mission och revolution i Centralasien*, Stockholm, 1981. ですでに述べられている。しかし、いずれにしても、本書が東トルキスタン史の興味深い一アスペクトに光を当てたことは、特筆に価しよう。

一方、この印刷所から産出された出版物はすべて、当地域の歴史的状况を究明するための第一級の資料である。とくに、一九三〇年代にトルコ系住民自身によって書かれ、反乱勢力および省政府権力のもとで印刷された文献は、まさしく「一次史料」であると言って間違いない。本書が、これらの出版物の存在、現存状況、それらの印刷作業と伝道団の活動や周囲の政治情勢との関係、といった事実を始めてかなり詳細に示したことは、ほとんど未知の重要史料に関する情報の提供という点で、歴史研究への貴重な貢献という側面をもつ。

そこで、残るスペースで、「カシユガルからの印刷物」そのものについて触れておく。

ルンド大学図書館には、(7)の目録に掲載された現存する全ての出版物のオリジナル、もしくはコピーが所蔵されている。全て氏によって母校である同大学にもたらされたものである。ちなみに、スウェーデン伝道団と氏が將來した東トルキスタン関連チャガタイ語・東トルコ語写本のコレクションも同大学図書館写本部に所蔵されており、氏自身による手書きの目録(それ自体「写本」である!)が作成されている。これらの写本の一部は、すでに金浩東(キム・ホドン)氏と濱田正美氏によって利用された。

私がヤーリング氏のご厚意によって実見したところによれば、ルンド大学図書館における「カシユガルからの印刷物」の保存状況は、次のようになっていいる。定期刊行物以外の出版物が年次ごとにパッケージされ、『カシユガルからの印刷物』に掲載された当該文献の項目と同一の通し番号が打たれている。これらとは別に、定期刊行物、すなわち東トルコ語の新聞は、一つの段ボール箱に一括して収納されている。仮製本された新聞の四つの冊子状物と、一つのビニル袋に入った新聞の束からなる。基本的には刊行物の種類ごとに塊をなし、一つの冊子中に複数年次の連続するバックナンバーが綴じられているものもある。これに対し、『カシユガルからの印刷物』では、あらゆる出版物が年次ごとに整理されているため、同一の定期刊行物が年次

ごとに分断された上で、同じ刊行年に属する単行出版物と共に掲載されている。したがって、本書の(7)における文献の仕切り方は、ルンドで所蔵されている実際の文献の存在のし方とは必ずしも合致しない。

「カシユガルからの印刷物」のコレクションの内訳は、大きく分けると、伝道団自身の宗教・教育・文化活動に基づく出版物と、その時々政府権力の要請によって印刷された出版物からなる。とくに、後者に属する、一九三〇年代に印刷された政治的冊子や新聞資料の類は、民族運動におけるトルコ系住民の主体的動機・認識・動向、地方政府の活動とその現地社会への影響などをリアルタイムで伝えると思われる点において、当時の具体的状況を検討するための最も基本的で不可欠の材料である。二〇世紀前半の東トルキスタンにおいて、実際に事態に関わった当地のトルコ系ムスリムの手により当該時期にもされた一次史料は、これらの他にはほとんど見当たらない。それにも拘らず、「カシユガルからの印刷物」を史料として本格的に利用した歴史叙述を現在まで私は知らない。また、これらは、他の国家・地域、例えば新疆にも残存することが確認されていない。新疆には、二〇世紀初めにカシユガルで活躍したイスラム改革主義者アブドゥカデイル・ダモツラの著書などが現存するようであるが、それらにアクセスする

ことは困難である。

要するに、本書が「カシユガルからの印刷物」の詳細と所在を具体的かつ明確に指摘したことによって始めて、二〇世紀前半期の東トルキスタン史を解明するための、史料面における主要条件の一つを充たす機会が到来した。将来、カシユガル印刷所の出版物やスウェーデンの教会関係の資料を全面的に活用することにより、東トルキスタン史研究に新たな展望が開かれるかもしれない。そのことは、「カシユガルからの印刷物」を収集・整理・保存し、ルンド大学図書館に寄贈した上で、『カシユガルからの印刷物』において目録と共にそれらを紹介したヤーリング氏の努力の賜物と言ふべきであろう。

(Gunnar Jarring, *Prints from Kashghar: The Printing-office of the Swedish Mission in Eastern Turkestan, History and Production with an Attempt at a Bibliography*, Stockholm: Svenska Forskningsinstitutet i Istanbul, 1991, 140pp.)

〔付記〕ご助力を頂いた、ヤーリング博士、濱田正美氏、そしてとくに真田安氏には、感謝の意を表したい。また、スウェーデンでの調査はトヨタ財団からの研究助成（個人奨励研究）によった。